



研究集録1

神戸大学教育学部附属養護学校

(Citation)

研究集録, 1:0-4

(Issue Date)

1971-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

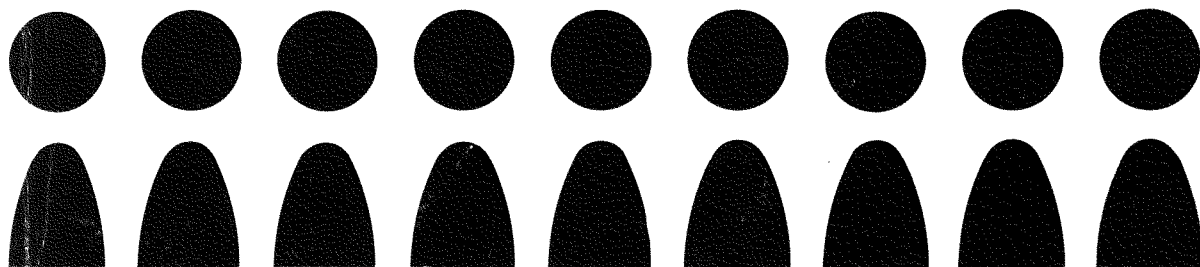
(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009902>



本校の教育目標達成のための

専科制による効果的な指導のこころみ



昭和46年12月7日（火）

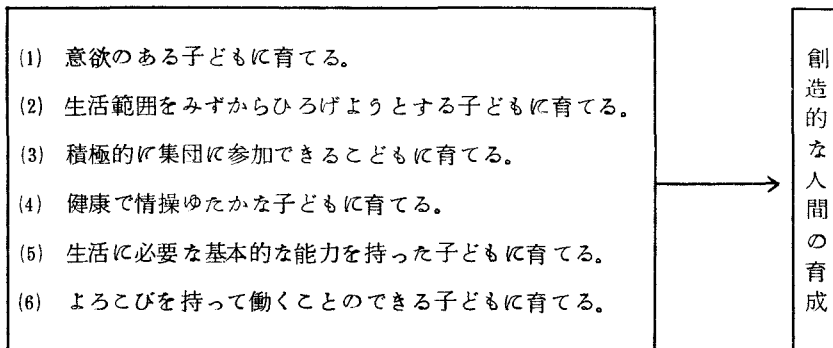
神戸大学教育学部附属養護学校

第 1 章 本校の教育課程

本校には、現在小学部から高等部 2 年生まで 81 名の児童生徒が在籍している。いずれの児童生徒も隣接市町村から通学している。これら児童生徒の実態は多種多様であって、個人差もかなりはっきり認められる。このような児童生徒に対してわれわれ 23 名の教職員は日々新たな気持で教育の営みを続けているのである。ひとりひとりの児童生徒をのびすためにわれわれは次の 3 項目にしたがって本校の教育課程を考えてみたのである。

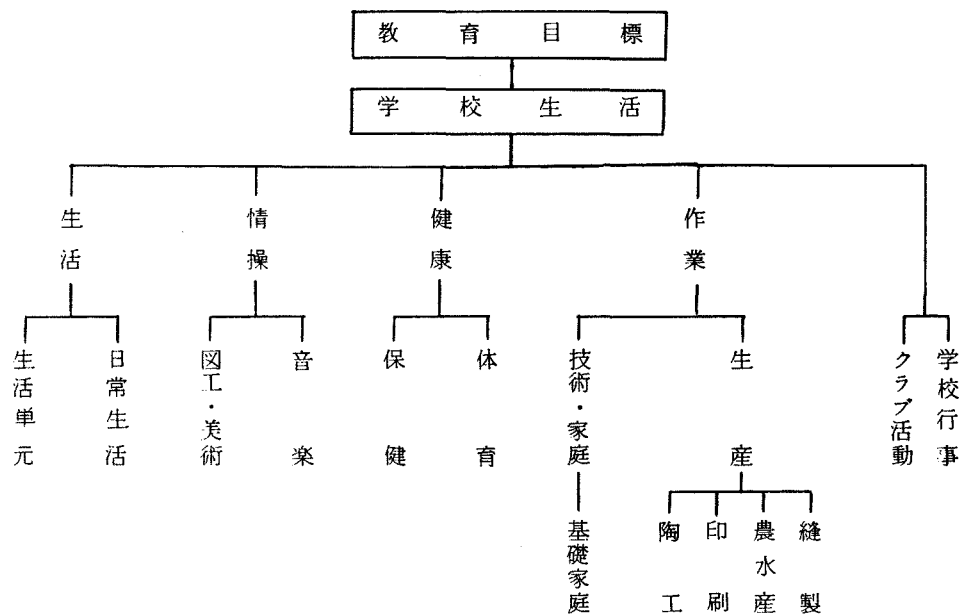
1. 教育目標

日々の教育の営みを通して児童生徒をみるとき、われわれ教師は、この子どもたちに何を望み、どんなことをしようとしているのかということおよびわれわれに課せられた任務は、ということなのかななどを考えて、次のような教育の目標を考えたのである。



2. 構造図

上に述べた教育目標を達成するためのやゝ具体的な目標、指導内容および指導方法というものを学校生活を基盤として考えてみた。すなわち、学校生活の深まりとそのひろがりそれぞれの子どもに応じて適切に配慮することが教育目標達成への道と考えたのである。学校生活に含まれるいろいろな教育内容とその形態を具体的に 10 の分野にまとめ、さらにこれらの分野を生活、情操、健康および作業の 4 つの領域にまとめてみた。その内容と形態を構造化すると次ページの図のようになる。



3 指導形態

われわれは、すべての子どもがもつ諸能力を全面的に伸すことを基本的な教育理念とし、小学部から高等部までの一貫した教育をめざしているのであるが、なんといっても子どもの実態をよりよく把握し、よく理解した上で、教育課程について考える必要があると思う。本校の小学部1・2組では、その年度の新入生と、1～2年学校生活を経験した児童で学級編成がなされている。したがって、児童の実態は、それぞれの個人差をはっきりさせており、全体としては、自己中心的な言動が多く、直感的にしかものごとをとらえることができないし、また、衝動的に行動するようなことが多いように思われる。だから学校生活がそのまま指導内容となり指導方法となるわけである。上図でいえば、「学校生活」や「日常生活」そのものが教育なのである。そこで、学級担任がすべての分野・領域の指導を担当するのであるが、小学部の3・4組に編成されている児童は、1・2組よりもやゝ集団生活への芽ばえがあり、さらには、やゝ見通しを持った行動ができる上に、1つの課題にとりくむ態度が認められる。そこで、分化した分野（内容）で指導をすることを考えてみた。すなわち、小学部3・4組以上は学級担任以外の専科の担当により内容的にも方法的にもより高次なものへと高められる分野の専科的な分担（専科制）を考えたのである。上図で見ると、健康領域・情操領域・作業領域については、それぞれ専科の先生を配置してその指導を受けているのである。またクラブ活動や学校行事についても、より多くの先生と触れ合うことができるように考えているのである。

第 2 章 研 究 経 過

1 これまでの歩み

昨年度までにわれわれが取り組んできた研究は、児童生徒の発達段階に応じた指導内容とその指導方法とを追求することであり、また、児童生徒が自発的に活動し、よりスムーズに集団生活に参加していくようにするために遊びの研究を進めてきた。なお、新校舎の、建設にあたっては、児童生徒の実態を十分に考慮し、しかも教育効果をより一層高めるためにわれわれも各教室等の設計に参加した。特に小学部の児童のための教育環境としてふさわしく小学部棟を独立させ、高等部の教室は作業学習もできるように作業教室への転用を考慮して設計し、生活指導のための合宿訓練等ができるように整備された和室をつくり、さらには、全校生の動線を考えて体育館の位置を校舎の中心に設定したセパレート形式の校舎配置を考え、危険防止のための安全性も十分に考慮したのである。

2 本年度の研究テーマ

新校舎は、本年3月に完成し、今年度から新校舎での教育がはじまったのである。新校舎は旧校舎に比べて数多くの特別教室がありいろいろな設備も整っている。このことは、われわれに新しくかつ望ましい教育環境を教育に生かし、教育効果をより高めようとする意欲をかき立てたのである。そこで、各指導分野を分担して（専科制）教育の推進を図ろうと考えたのである。といっても、この専科制は昨年度までの本校教育の実践についての反省から生まれてきたものであって、決して新校舎のために生まれてきたものではない。いずれにせよ、ひとりの教師が、あれもこれもと雑多な教育分野をこなしていくことは教師にとってたいへんな負担過剰になったし、それぞれの内容なり指導方法なりと準備するための時間的な余裕もなかったようである。また、中学部の基礎的な指導（言語・数量）、あるいは作業内容の指導においては、生徒の発達段階によりグルーピングし、担任が分担してグループで指導をこころみたが、ともすると学級集団のまとまりや、集団を通しての指導に困難を見いだした。ただ、生徒が学級担任以外の教師とのつながりができたことは、利点であったように思われる。このような反省の上に指導内容の精選と深まり、それにともなう指導方法の改善、さらには学級集団の高まりを考慮して専科制の実践をこころみることになったのである。このことにより、児童生徒がより多くの教師とのつながりをもつことができ生活のひろがりや校時ごとの学習内容のちがいに児童生徒にけじめのある生活習慣をつけさせようとするものである。以上のような観点をふまえて「本校の教育目標達成のための専科制による効果的な

指導のこころみ」を4つの領域から追求することにしたのである。具体的な研究の経過としては、それぞれの領域におけるねらいと内容、それにもなう指導方法などについて授業研究、その他を通して主として領域担当者で検討してきている。なお、生活領域については全教官でとりくんできている。